

大輪だより

研究主題

「分かる, できる, 振り返る」
授業づくり



～大曲を代表する花火の「大輪」のように、子どもたちが大きく成長するようお願いをこめて～

平成 29 年度文部科学省委託 特別支援教育に関する実践研究充実事業

公開研究会を終えて

12 月 1 日に公開研究会が行われました。児童生徒が「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何を学んでどのようにどのような力が付いたか」と実感できる「分かる, できる, 振り返る」授業づくりが「できる状況づくり」定着、拡充につながると考えて研究を進めています。

12 月 1 日には公開研究会として、各学部の授業公開や寄宿舎の活動参観、分科会などが行われました。各分科会でのグループ協議や指導助言をまとめました。

<小学部分科会> 小学部 1 年

わくわくお話あそび ～3びきのこぶたのせかいへようこそ～

グループ協議より

成 果

- ・導入部分での児童全員が参加できるペープサートの提示が意欲付けになっていた。「分かる」「できる」にもつながっていた。
- ・制作や遊びの場面で、児童の自発的な姿を引き出す素材や教材が用意されていた。
- ・児童の気付き、児童同士の自然な関わりが見られた。

課 題

○遊び方

- ・生活単元学習としての課題を押さえておくことでどう遊ぶかがはっきりする。
- ・児童同士の関わりや児童の満足感を増やすために、こぶたの家に児童全員が集まる場面を設定する。

○振り返りの場面

- ・自分たちで作ったこぶたの家の完成場面をみんなで見合う場が必要であった。「できた!」が分かるように、全員で屋根をつけて完成させる活動があればよかった。また、完成時に物語と同じ進め方にする達成感につながったと思われる。
- ・児童の活動する姿、児童から表出された言葉をまとめにつなげる。
- ・児童の気持ちをくみ取った言葉掛けを行う。

<指導助言>

- ・導入で子供たちが参加している様子が、たくさん見られた。ペープサートのストーリーに参加するという場面がその後の制作活動や遊びにつながっていた。
- ・一人一人の児童が参加できる活動が用意されていると期待感をもって活動できる。
- ・児童全員が自然に集まる場面があり、教師は気持ちに寄り添いながら見守っていた。遊びは児童が工夫して発展されるものである。それ自体が目的であり、児童が予想しない動きをしても見守る支援が必要である。
- ・この単元で、どのような力を付けてほしいのかを考えることが大切である。本時は存分に遊ぶ活動でも、単元を見通した中でのおねらい、まとめ、評価になっているとよい。

グループ協議より

成 果

- ・板書が整理されており、めあてと今日の活動が明確に示されていた。
- ・チラシを作るための写真を選ぶ場面では、生徒とのやりとりが丁寧で、これまでの授業に関する発言が出るなど学びの積み重ねが見られた。また、考えを変更する時間も設けられていた。
- ・拡大チラシをまとめて示しており、完成形をイメージできて見通しがもちやすかった。また、完成後、生徒たちが喜んで拍手していたことから達成感を味わっていた。

課 題

○チラシの記事作りにおいて

- ・「楽しさ」＝「PR」ではない。楽しさをどうやって伝えるか検討が必要である。
- ・表現の幅を広げるためにも国語科との関連が必要である。

○話し合い活動において

- ・教師との話し合いが主で生徒同士のやりとりが少なかった。
- ・生徒同士の学び合いを高めていくために、生徒の役割を設けてもよい。
(例えば、司会や文章のチェック係など)

○生徒がより達成感を感じるために

- ・座っている活動が多かったので、生徒が活動しながら考える場面があってもよい。
- ・チラシ作りでは、始めからグループに分かれて数種類のチラシを作る活動も面白い。
- ・生徒自身が自分たちのがんばりで成果が得られる工夫があればよい。

< 指導助言 >

○指導案について

- ・「生徒と単元」の部分で、単元の経緯や連続性がより分かりやすくなった。どうしてこのような授業にしたいかが盛り込まれていてよかった。

○授業について

- ・「楽しさ」をイメージできるようにいくつかキーワードを示しており生徒の手掛かりになっていた。しかし、「楽しさ」について生徒へ問いかけて、考えを引き出すこともできたと思われる。
- ・写真を選ぶ場面では、他の生徒の意見を聞いて自分の考えを変更することがよかった。
- ・拡大チラシはゴールとして具体的で分かりやすい。記事作りにおいては「選んでよかった。」「いい表現だった。」と生徒が感じることができるよう教師のフィードバックが大切になってくる。
- ・チラシの文章については正しい文章表現であることが大事である。
- ・生徒の気持ちや考えをひろってみんなで共有すれば、もっと一体感が高まった学習となった。

<高等部分科会>

高等部 1 年

「よさこいズ 18」発表会④ ～横手支援学校との交流会を成功させよう～

グループ協議より

成 果

- ・タブレットを使用した自己評価が有効であった。
- ・生徒同士の関わりが十分もっていた。
- ・板書が整理されて、見やすい。単元のゴールが分かりやすい。
- ・めあてが分かりやすく、主体的な活動につながる板書であった。

課 題

○板書の情報量の多さ

- ・大事な部分の文字の大きさやレイアウト、板書の流れが上から下、左から右なのか検討する。できること、分かっていることの板書は減らす。

○めあての具体化

- ・「～を工夫しよう」よりも具体的に「話し合う」「決める」「見付ける」などにする。

○話し合い活動の充実

- ・話し合いのポイントをしぼり、話し合う内容の優先順位を示す。
- ・生徒のみの話し合いが可能なグループには流れを示す台本を用意し、教師が少し離れる。
- ・LHR など生単以外の学習場面でも話し合い活動を取り入れる。

○生徒同士の関わりを増やす工夫

- ・他のグループの生徒がゲスト審査員として踊りの評価をしたように、グループ内だけでなく、グループを超えた関わりをする。

<指導助言>

- ・板書はよくまとめられ、生活単元学習として一つの形ができた。
- ・生徒同士の主体的な関わりでは、ペアワークや依頼書の活用などで一体感のある授業になった。
- ・グループの「めあて」に対する中間評価をみんなに呼び掛ける生徒がいた。友達からの評価（改善点）を受け入れて行っていたことを教師が見届けて評価してほしい。
- ・教師の関わりでは、すぐに説明せずに「どうして」などと問い返すところがよかった。
- ・話し合い活動は、教師が入らないときに、自分の体験を交えた意見を発言し、活発であった。教師がいれば頼ってしまうので、あえて場を離れる設定も必要である。
- ・身に付けたこと、経験したことを使って考えているか、活動しているかを習慣化する。この単元でできたことを使って授業をするときは、以前やったことを引き出す、以前にしていた支援は外すという手立ての吟味をし、過不足のない支援をする。これまでの学習でできるようになったことが、他の授業や生活場面でどれくらいできているのかという視点で検証する機会を設けてほしい。

<寄宿舍分科会>

生徒同士が活発な話し合い活動を行うための効果的な指導方法について

グループ協議より

キーワード

<1グループ>

事前事後 **話し方、聞き方のルール** **共感や肯定する** **環境設定、ツール**

→ルールの提示は話し合いをするためには有効。これらが基になり、自信をもって意見を伝えたり、活動したりする姿となると考える。

<2グループ>

リーダーの育成 **伝える手段** **指導方法の共有**

→指導を共有することで一貫した指導や共通した指導につながる。課題として挙げられた職員の働き掛けは共有することで話し合いに向かう姿勢にもつながる。

<3グループ>

環境設定 **教材** **事前指導** **ロールモデル**

→教材として活動後に新聞作りをしている。話し合いでは相手の気持ちを考えて、違う意見と折り合いを付けることが必要である。

<4グループ>

話し合いの視点 **環境設定** **日常生活指導** **実践的な報告**

→人的環境には職員側、生徒側があり、物的環境ではきっかけや関心をもつための提示の仕方为主体的な姿につながる。生徒の気持ちを育てようと日々行うことで生徒の言動を尊重し、それが安心感につながり、伝えようとする気持ちが育つと考える。

<指導助言>

- ・「活発な意見交換をするための視点」について、協議を受けて、内容を整理し、自分たちで考えた視点にして欲しい。
 - (1) 伝える側→**必要性** 題材に興味あるものにする、話し合い後のフォローと確認
 - (2) 伝えるスキル→**話し合う方法** ルール、約束、役割分担等の方法を整える
 - (3) 相手との関係性→**マナー、共感、肯定など職員の役割** 職員も話し合いに入る
 - (4) 伝えやすい環境→**話し合いに至るための環境設定** グルーピング、ツール等の準備
 - (5) 考える機会→**要因や理由の分析** 事後のフォロー、振り返りと分析
- ・話し合い活動を始めるまでの準備に丁寧に時間をかけていること、実践後の振り返りを行い、PDCA サイクルとして取り組んでいることで成果につながっている。
- ・職員ワークショップ、学部への授業参観をすることで、参考となる指導を指導員間で取り入れているところがよい。
- ・評価や視点などがたくさんあるため、確実に使えるもの、職員が変わっても分かるものとして整理する。
- ・生徒たちが自分の気持ちと折り合いを付けながら意見を話したり、他の生徒が誘う働き掛けをしたりなど、生徒同士が話し合える雰囲気になっていた。
- ・話の聞き方について、どういう時に聞けるか、どんな時に聞くことが難しいかを分析した上で、聞くことの大切さを伝えることが必要である。
- ・話し合い活動を手段として、自分の考えや思いを伝えることができる姿を忘れずに進め、話し合い場面での変化や日常生活でどのように身に付いてきているか、生徒を認めて、褒めて欲しい。寄宿舍の生徒をみんなで見ているという意識は指導員の得意分野であり、指導の共有をさらに高め合って欲しい。